【大型船舶の安全対策について】

網走港ローカルルール　　平成27年3月26日　網走港船舶航行安全対策検討会

対象岸壁	第4ふ頭1号岸壁、2号岸壁 水深　-10.0m	備考
対 象 船 舶	11万6千GT級旅客船以下	
航　路	喫水を9.0m以下に調整すること 航路幅員0.5L以上1.0L未満の船舶は曳船の支援を得ること 航路幅員0.5L以上1.0L未満の船舶は入出港時の行会い・競合の調整を行うこと	10%の余裕水深を常時確保すること 対象船舶(ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞﾌﾟﾘﾝｾｽ)最大喫水8.57m×1.1＝9.43m 全長は288.33m、航路幅員0.5L (144.2m) 航路幅員　190m/全長288.33m=0.65L
喫　水	9.0m以下	10%の余裕水深を常時確保すること
水 先 人	要	
タ グ ボ ー ト	1隻以上配備 3,000馬力級	
夜 間 入 港	不可	
夜 間 停 泊	可	
夜 間 出 港	可（前路警戒船が先導するなど必要な対策を行うこと）	原則として入出港時間は日出から日没までの間とする。
入 出 港 時 風　速	入出港時　平均風速　10m/sec以下	
波　浪	港内波浪が概ね1m以上となるときは、入出港を中止することを検討する。	港外波高1.5m以下
視　界	泊地から防波堤間付近が見通せる視界1,000m以上とする。	
接 岸 速 度	6cm/s以下（岸壁手前で一旦停止後）	
係　留	係留中に入出港時風速基準を越えると予想される場合は強風対策を実施する。 係留索は、直柱も使用し係留する。	
係留限界風速	14.3m/sec	出船左舷付け

【係留時等の安全対策】

行会い・競合の回避対策

網走港に入出港する船舶の出入予定時刻を関係機関と調整する。

強風対策

最新の気象情報を入手し、入出港時風速基準を越えると予想される場合は、次の安全対策をとり、状況に応じて港外避泊するものとする。

①係留索の増取りを行う。

②サイドスラスターを準備し、適宜使用する。

③必要に応じ押しつけ用のタグボートを配備する。

工事中の対策

工事期間中に大型旅客船が入出港する場合には、工事作業船を移動させるとともに、工事作業区域のブイを一時的に撤去する等の対応策を取り、可航水域を最大限に確保する。

異常気象・地震・台風・津波時の対策

台風や津波などの異常気象が予想される場合、「オホーツク海沿岸地震・津波・台風等対策連絡会」の指針に従うこととする。

また、対象船舶については、本船船長の判断により離岸、避泊するものとし、避泊にあたっては時間的余裕をもって行動する。

入出港経路の周知

対象船舶は、釧路水先人会の水先人を有して入港してくることになるが、入出港経路については、別紙のとおりとする。

また、網走港へ入港する船舶へ「ホタテ中間育成の区域」、「定置網の位置」などの周知を行う。

周知の方法は、船舶代理店から情報提供をお願いする。

水先人の乗船位置

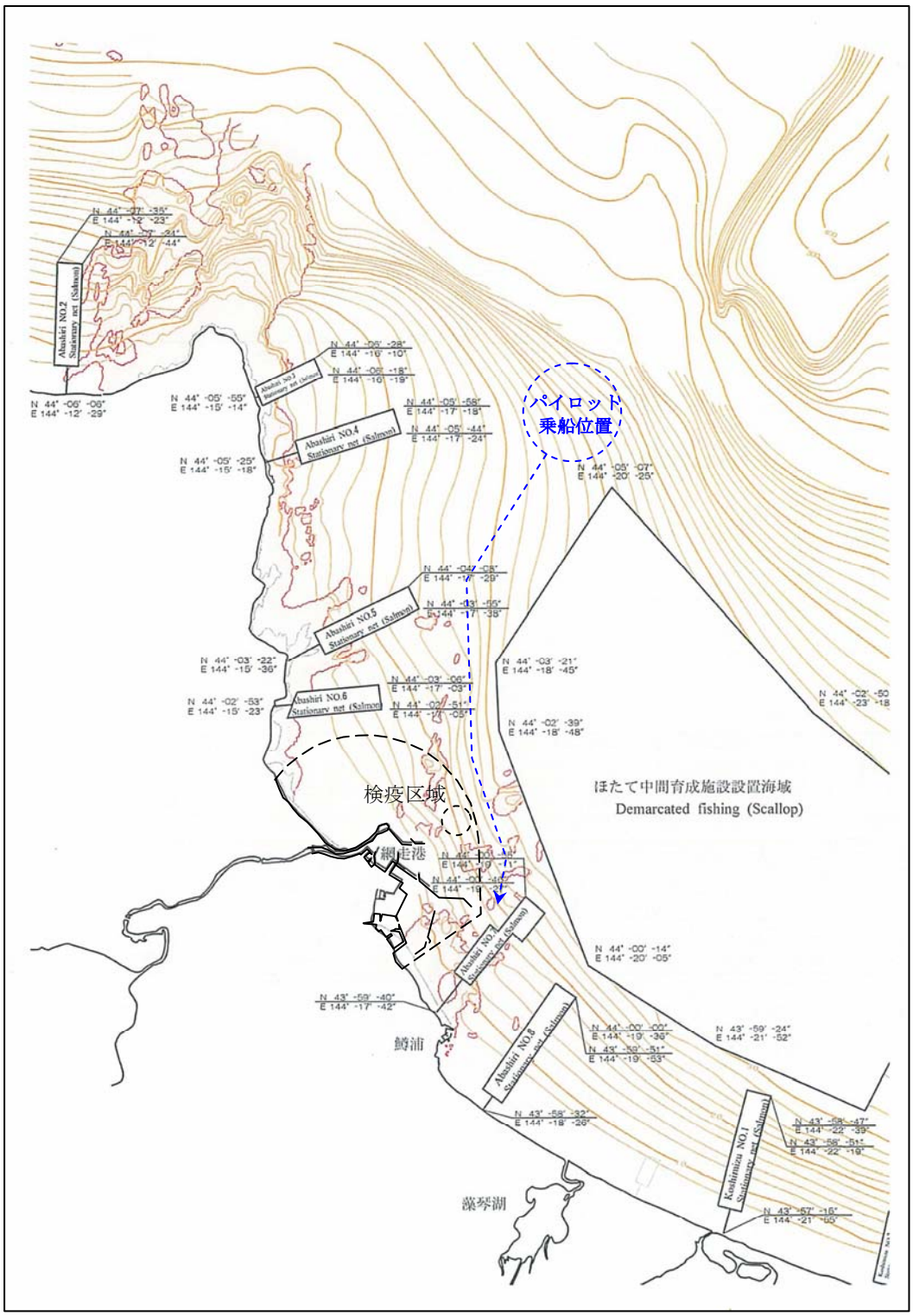
水先人の乗船位置は、ホタテ中間育成施設設置海域の北側とする。（詳細日時や場所は、釧路水先人会と調整すること。） 別図参照

合意事項の周知

検討会にて決定した事項に関しては、安全かつ効率的な運用のため、船舶関係各社及び関係船舶に対し、本合意事項の周知と確実な励行を図るものとする。

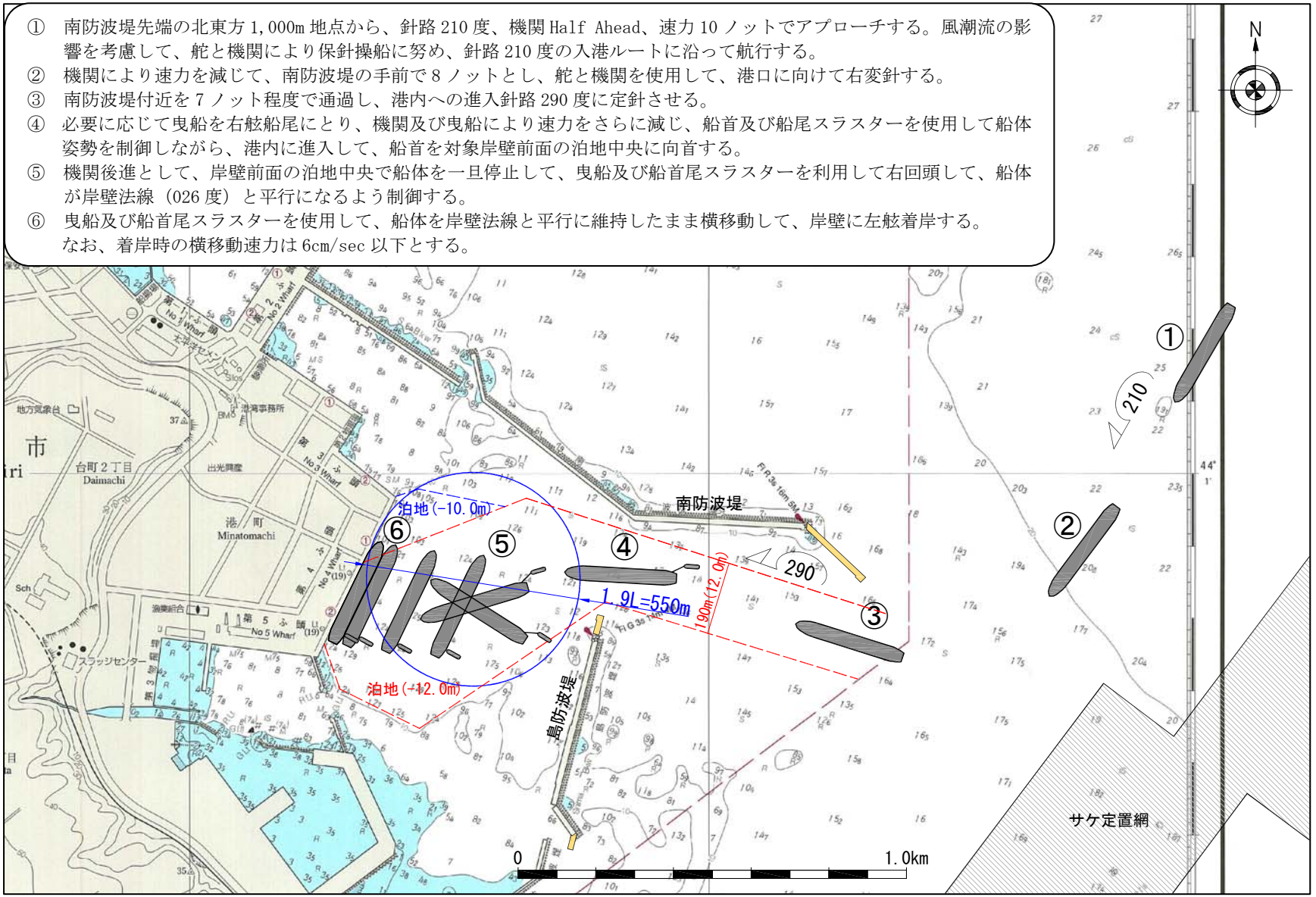
【水先人の乗船位置】

大型旅客船の入出港にあたって、想定されるパイロットの乗船位置を図に示す。



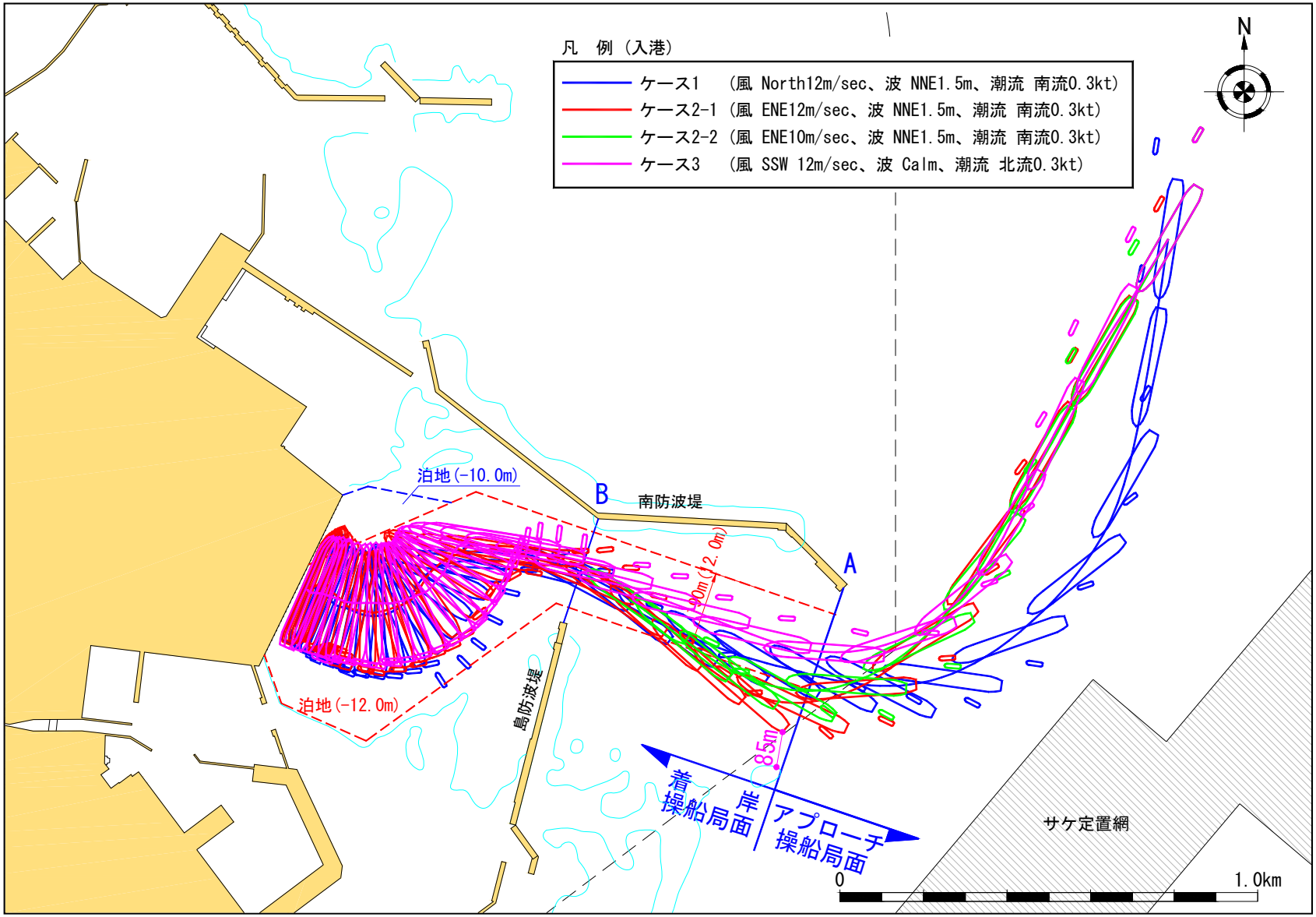
想定されるパイロットの乗船位置

① 南防波堤先端の北東方 1,000m 地点から、針路 210 度、機関 Half Ahead、速力 10 ノットでアプローチする。風潮流の影響を考慮して、舵と機関により保針操船に努め、針路 210 度の入港ルートに沿って航行する。
② 機関により速力を減じて、南防波堤の手前で 8 ノットとし、舵と機関を使用して、港口に向けて右変針する。
③ 南防波堤付近を 7 ノット程度で通過し、港内への進入針路 290 度に定針させる。
④ 必要に応じて曳船を右舷船尾にとり、機関及び曳船により速力をさらに減じ、船首及び船尾スラスターを使用して船体姿勢を制御しながら、港内に進入して、船首を対象岸壁前面の泊地中央に向首する。
⑤ 機関後進として、岸壁前面の泊地中央で船体を一旦停止して、曳船及び船首尾スラスターを利用して右回頭して、船体が岸壁法線（026 度）と平行になるよう制御する。
⑥ 曳船及び船首尾スラスターを使用して、船体を岸壁法線と平行に維持したまま横移動して、岸壁に左舷着岸する。
なお、着岸時の横移動速力は 6cm/sec 以下とする。



入港操船例図（出船左舷付け）

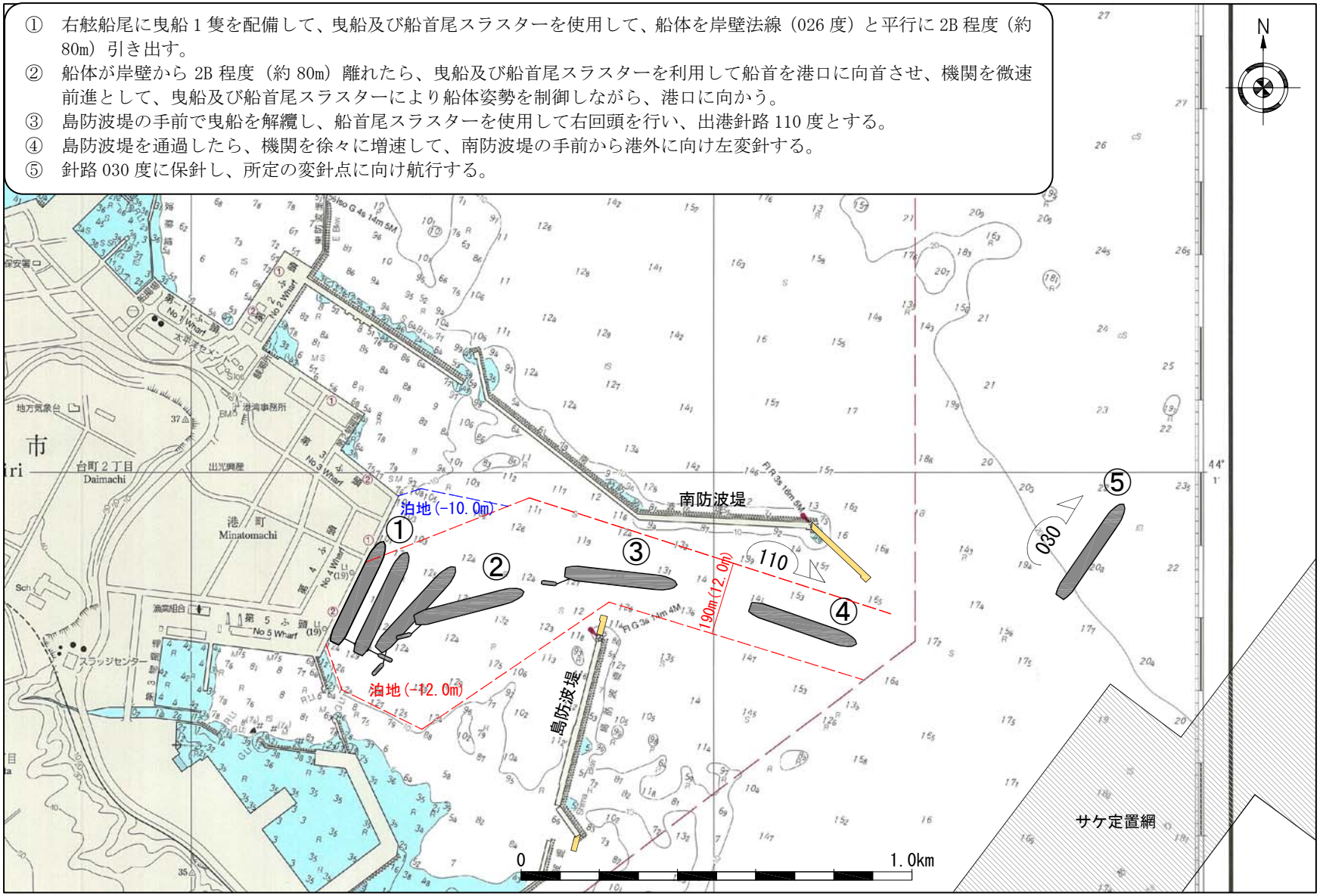
11 万 6 千 GT 級旅客船　全長 288.33m



入港操船の航跡図

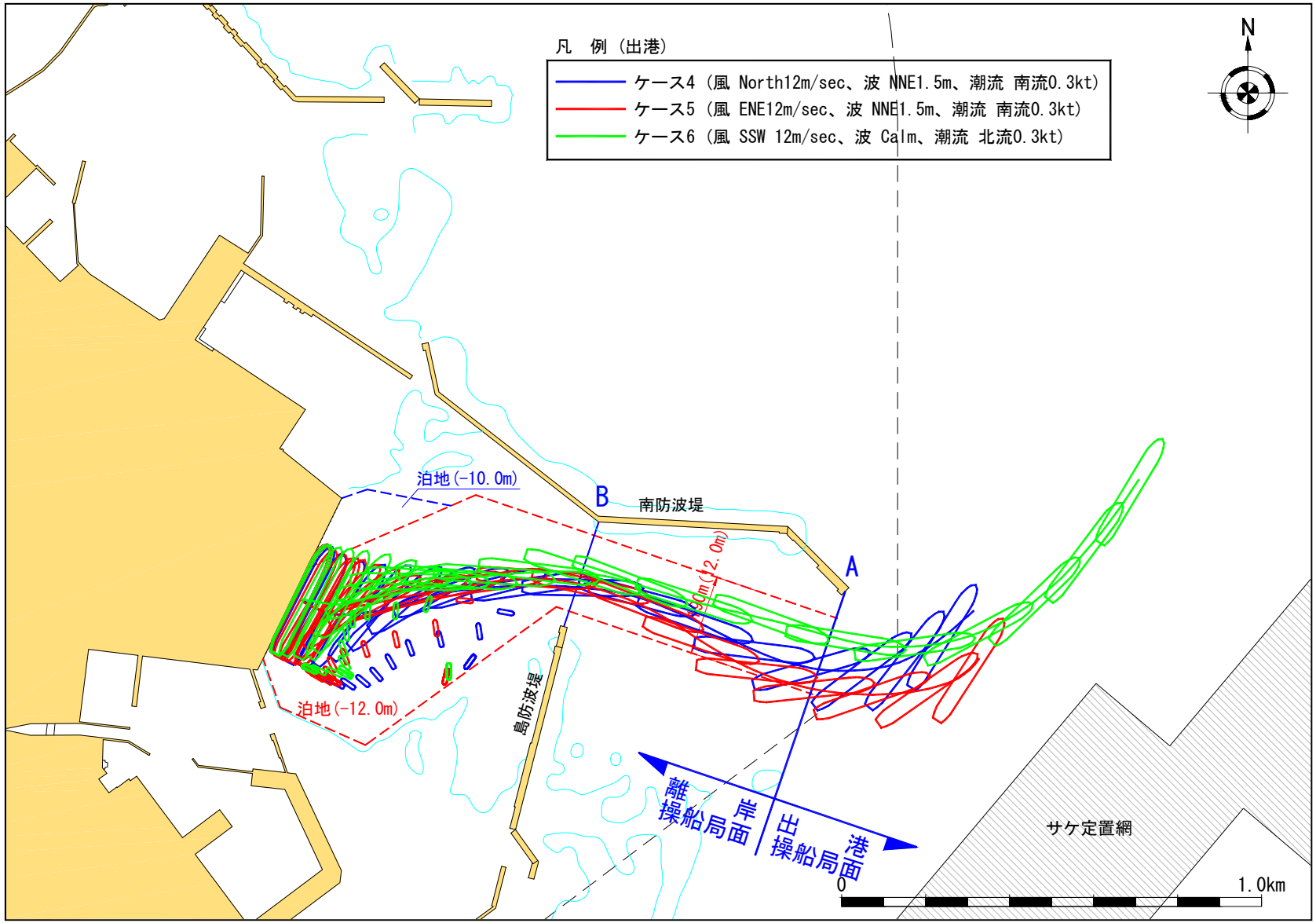
11 万 6 千 GT 級旅客船　全長 288.33m

① 右舷船尾に曳船 1 隻を配備して、曳船及び船首尾スラスターを使用して、船体を岸壁法線（026 度）と平行に 2B 程度（約 80m）引き出す。
② 船体が岸壁から 2B 程度（約 80m）離れたら、曳船及び船首尾スラスターを利用して船首を港口に向首させ、機関を微速前進として、曳船及び船首尾スラスターにより船体姿勢を制御しながら、港口に向かう。
③ 島防波堤の手前で曳船を解纜し、船首尾スラスターを使用して右回頭を行い、出港針路 110 度とする。
④ 島防波堤を通過したら、機関を徐々に増速して、南防波堤の手前から港外に向け左変針する。
⑤ 針路 030 度に保針し、所定の変針点に向け航行する。



出港操船例図（出船左舷付け）

11 万 6 千 GT 級旅客船　全長 288.33m



出港操船の航跡図

11 万 6 千 GT 級旅客船　全長 288.33m